

点検・評価ワーキンググループ（第2回）

1 日 時 : 平成 21 年 2 月 5 日（木） 10:00～12:00

2 場 所 : 合同庁舎第 4 号館

3 出席者

（構成員）佐藤博樹座長、清水誠委員、武石恵美子委員、永井暁子委員、樋口美雄委員、三輪哲委員（阿部正浩委員は欠席）

（関係省）厚生労働省、経済産業省、文部科学省

（内閣府）山田次長、本多参事官、酒巻参事官

4 主な指摘事項

実現度指標では、指標の水準というよりはトレンドを見ていくということになる。指標の一つである正規・非正規の賃金格差については、勤続年数など属性を絞るのではなく、正規・非正規という働き方、雇用形態の違いの格差と考えて、属性を絞らずに平均の値で計算することも考えられる。

正規・非正規の賃金格差については、試算では、勤続年数を 5 年から 9 年に限定しているが、非正規の勤務実態からするとやや長過ぎるような気もする。例えば、勤続年数を 1～2 年とか 3～4 年にして試算してもらい、それを見るということも考えられる。

趣味・娯楽等の行動者率については、調査票記入期間において、趣味・娯楽に時間を費やした人の行動者率をとっていたが、修正後は過去 1 年間に趣味・娯楽に時間を費やした 15 歳以上の者の行動者率とした。この点については、調査日における天候などの影響もあるため、1 年間の行動者率でとる方が安定しており、トレンドを見るにはよい気がする。

実現度指標の見方について、分野ごとに方向性をみることには意味があると思うが、分野ごとの変化幅を比較することには意味がないと考える。

実現度指標は分野ごとにつくっているが、絶対水準を見ているわけではなく、変化を見ており、すごく低いところから始まっているものもあると思う。

以上